

No. 23 重点感染症シリーズ

20 世紀以前のインフルエンザ・パンデミック

紀元前の記録にもインフルエンザを彷彿する記載がある。中世ヨーロッパにおいても、断片的ながら類似の流行に関する記録が残るが、確定的ではない。明確な記録が残るのは 16 世紀以降であり、世界的規模の流行、いわゆるパンデミックが数十年ごとに到来したとされる。

本稿では 20 世紀以前のインフルエンザ・パンデミックについて概観する。

1. 史書にみるパンデミック

医学の祖・ヒポクラテスが遺した書物の中にインフルエンザを思わせる流行病が言及されている。紀元前 5 世紀末から 4 世紀初頭に書かれた『ヒポクラテス全集』には「冬至の頃の咳嗽病（咳の出る病気）の流行」（第 29 編流行病の第 6 章第 7 節 1 項）「ペリントス¹で春に多くの癆症患者（肺結核患者）が出て、その原因として冬に咳嗽が流行」（同 10 項）と冬期に呼吸器疾患が流行したことを示唆する記述がある。また、「冬期間に流行性咳嗽から発する急性熱病に罹った患者」という記載（第 7 章 59 項）は、インフルエンザ流行を彷彿させる。同章には「小児を主体とする咳嗽の流行」とも記載され（同 105 項）、当時すでに咳や発熱を主徴とするインフルエンザ様の疾患が流行したことがうかがえる。

¹ プロボンティス（マルマラ海）北岸に建設された古代ギリシャの植民都市。現在はトルコ・マルマラエレグリン。

2. 16 世紀のパンデミック

16 世紀は、初頭（1510 年）、中葉（1557 ～ 1560 年）、末期（1580 年）と 3 回にわたってインフルエンザ・パンデミックが到来した（表 1）。本格的な航海時代を迎えたこの世紀、東西を結ぶ海上ルートの開拓に伴い、欧州諸国によるアメリカ大陸の植民地化が進み、先住民に免疫のないウイルスが持ち込まれるようになった。

表 1 16 世紀のインフルエンザ・パンデミック

年	主な感染経路	主な流行地域 欧亜米露他	備考
1510	マルタ島→地中海沿岸	●	・記録上、最古のインフルエンザ・パンデミック ・感染率は非常に高かったが低死亡率（除小児）
1557 ～ 1560	（アジア→）欧州	● ●	・高い死亡率（英で死亡率 20% という記録あり）
1580	アジア→コンスタンチノール→欧→米	● ● ●	

記録に残る最古のパンデミック（1510 年）

世界的なインフルエンザ・パンデミックとして記録される中で、最古のものは 1510 年の流行とされる [1, 2]。アフリカ・マルタ島から地中海沿岸を経由して拡大したこの流行は、欧州全土を席卷し、北海沿岸、バルト諸国にまで伝播した。このパンデミックの感染率は非常に高かったが、死亡率は小児を除いて比較的低かったとされている [3]。また、英国の記録には、このパンデミックと牛の伝染病の関係を示唆する記述も認められる [2, 4]。

再びパンデミックに見舞われた欧州（1557 ～ 1560 年）

アジアに端を発したとされるインフルエンザ・パンデミックが 1557 ～ 1560 年にかけて欧州を再び襲った。このパンデミックは致死性が高く、英国での死亡率は 20% に達したとする報告もある [5]。労働者が次々と病魔に倒れ農作業者が不足し、畑の穀物が失われ食糧難にも見舞われた。栄養状態の悪化により人々の抵抗力は低下し、さらなる感染拡大を招くという悪循環に陥った。影響は深刻で、英国民のおよそ 3 人に 1 人が罹患したという [1, 6]。一方、この時期の死亡率については過大評価であると指摘する論文もある [7]。

また、この時期、日本の地誌『雍州府志』²にもインフルエンザ流行を想起させる記載がみられる [8]。

² 1686(貞享 3) 年に刊行された山城国についての総合地誌。本来「雍州」は長安を含む中国の州であったが、当時は京都を含む山城国の雅称として遣われていた。

欧州に再々来たパンデミック

アジアに端を発したインフルエンザ・パンデミックが、コンスタンチノール（現在のイスタンブール）を経由して西進、1580 年には欧州一帯に拡大し、後に米国にまで到達した [3]。イタリア・ナポリでは 8 ～ 9 月にかけて、ドイツでは夏から秋にかけて流行したとされる。英国では、第 1 波が 8 月半ば～ 9 月終わり、第 2 波が 10 ～ 11 月に襲来した。

ローマでは当時一般的であった瀉血（患者から血液を抜く治療）が多用されたが、むしろ死亡者数の増加を招いたとされる [2]。

3. 18 世紀のパンデミック

17 世紀にはインフルエンザ大流行の記録が見当たらない。これが、実際にパンデミックがなかったことを意味するのか、あるいはペスト大流行の陰に埋もれていたのかは定かでない。1610 年からスイスで流行したペストは、欧州で猛威を振るった。特に 1665 年頃にロンドンが受けた大打撃は“Great Plague of London(ロンドンの大疫病)”と称されている。18 世紀に入ると、複数のインフルエンザ・パンデミックが到来した（表 2）。

ロシア発のパンデミック（1729 ～ 1730 年）

1729 ～ 1730 年にかけて、ロシア発のインフルエンザ・パンデミックが発生した [3]。1729 年 4 月にモスクワで流行が始まり、ドイツ、オーストリア、英国、フランスを経て、1730 年 3 月にはイタリアに至った [3]。罹患率はきわめて高く、ローマでは約 6 万人が感染したとされている。

また日本でも、『享保世説』（享保年間の世相を記した書）に、享保 15 年（1730 年）にインフルエンザ様疾患が国外から長崎に侵入したことがうかがわれる記述がある [8, 9]（『5. 日本での流行』）。

再来したロシア発のパンデミック（1732 ～ 1733 年）

1732 ～ 1733 年にも、再び欧州でインフルエンザ・パンデミックが発生した [10]。1732 年 11 月にロシアからポーランドを経由してドイツで蔓延し、翌 12 月にはスイス、オランダ、英国に広がり、1733 年 1 月にはフランス、翌 2 月にはスペイン、イタリアに到達したとされる。

ただし、この流行が新興パンデミックウイルスによるものなのか、1730 年の流行の再燃なのかは不明である。一方で、1732 年 10 月に米・コネチカット州で起きたインフルエンザ流行が発端であるとする説もある [3, 11]。さらに、エジンバラでの記録によると、ヒトの流行が確認される以前（1732 年 10 月末～ 11 月初）、広域にわたって、馬が咳と鼻汁を主徴とする疾病に罹患していたといわれており [2]、ウマインフルエンザがこのパンデミックに関与したのではないかとする説もある [4]。

1733（享保 18）年には、日本でも疫病が流行したとの記録が複数の史書にみられる [8]（『5. 日本での流行』）。

北米発のパンデミック（1761 ～ 1762 年）

1761 ～ 1762 年にかけて北米発のパンデミックが発生し、その 1 年

表 2 18 世紀のインフルエンザ・パンデミック

年	主な感染経路	主な流行地域 欧亜米露他	備考
1729 ～ 1730	露→独・奥・英・仏→伊	● ● ●	・罹患率甚大（ローマで 6 万人感染） ・日本（享保時代）でも流行
1732 ～ 1733	露→ポーランド→独→スイス・蘭・英→仏→スペイン・伊	● ● ●	・北米起源説もあり ・日本でも（享保時代）流行 ・ウマインフルエンザとの関連説も
1761 ～ 1762	米・フィデルフィア→米・マサチューセッツ州→バルバドス島→独→ハンガリー・デンマーク→ロンドン	● ●	・高罹患率だが低死亡率 ・ウマインフルエンザとの関連説も
1780 ～ 1782	中国（南岸）→露→米	● ● ●	・中印での流行（1781）が露で拡大（シベリア経由）、さらに欧州に広がったという説も ・ロンドン王立医師会で“influenza”を呼称に採用

後に欧州に波及した [10]。1761 年冬にフィラデルフィアで流行が確認され、同年 4 月にはマサチューセッツ州、翌 5 月にはカリブ海のバルバドス島に到達したとされる。1762 年 2 月にはドイツでインフルエンザが確認され、同年 4 月にはハンガリーとデンマーク、5 月初旬には、ロンドンへと拡大した。なお、ロンドンでの流行に先立ち、イタリア、ドイツでも同様の疾患が流行しているが、イタリアではこの疾病がインフルエンザと呼ばれていたという記録が残っている [2]。このパンデミックでは罹患率は高いものの致死性は低かったとされる。

ヒトインフルエンザの流行に先行して、英国では馬の間に風邪と咽頭痛を伴う疾患（“horse-cold”）が流行していた。ロンドンにおける 1760 年 1 月の記録には「ジステンパー（発熱、鼻汁などを伴う疾病の総称）で 1 週間に 100 頭余りの馬が死亡した」とあり、ヨークシャー地方でも同年 2 月に類似の馬の疾病が流行したとされている [6]。

中国発のパンデミック（1780 ～ 1782 年）

1780 年 9 月に中国南岸地域で発生したインフルエンザは、その冬にはロシアへ、翌 1781 年には米国にまで到達したとされる [9]。一方、1780 ～ 81 年の流行と 1781 ～ 82 年の流行は異なるものとする見解もある。この説では、1781 年秋に中国からインドにかけて流行、シベリア経由で同年 12 月～翌年 1 月にモスクワ、1 ～ 2 月にセントペテルスブルグに伝播した後に欧州に広がったとされる [2, 3]。なお、このパンデミックに際して、“Influenza”という呼称がロンドン王立医師会で正式に採用された [27]。この語は、1357 年にイタリアで大流行した際に初めて用いられたとされている。

4. 19 世紀のパンデミック

海陸ともに交通が革新した 19 世紀。主要な海洋交通機関は帆船から蒸気船へと移行し、欧米各地で鉄道の敷設が進んだ。それに呼応するかのよう、インフルエンザの伝播もより広範かつ高速になっていった（表 3）。

中欧を核としたパンデミック

（1800 ～ 1801 年、1802 ～ 1803 年）

1800 年の第 4 四半期から 1801 年初頭にかけて、ドイツ、フランスはもとより、中国、ブラジルにまで流行が及んだ。さらに 1802 年冬にフランスで再燃すると、1803 年 4 月までにはドイツ、イタリア、イギリス、スイスへと拡大した [24]。このパンデミックでの死亡率は低かったものの、ロシアでは瀉血の多用によって多くの農民が命を落とし、ロシア皇帝はこれを禁止する勅令を発した。

No. 23 重点感染症シリーズ

20 世紀以前のインフルエンザ・パンデミック

1803 年の流行当時、英国では、ヒトインフルエンザ流行に先駆けて、豚や牛で致死性の高い疾病が発生する地域があった。このほか、馬、犬、子羊、猫などでもインフルエンザ様の疾患が流行したとされる [2]。

海運が流行を媒介したか

中国発のパンデミック（1830 ～ 1833 年）

1830 年 1 月および 9 月に中国で流行したインフルエンザは、同年 9 月にはフィリピン・マニラでの流行を引き起こした。ジョージ・ベネット（George Benett）によれば、9 月 18 日に中国からマニラに到着したチャールズ・フォーブス号の船員たちの間で、航海中すでにインフルエンザが蔓延していたとのことである [12]。その後、11 月にモスクワ、1831 年初頭にポーランド、ボルネオ島、スマトラ島へと伝播し、5 月から 7 月にかけてドイツ、フランス、イタリア、英国、スウェーデンに拡大した [6]。

この流行のさなかの 8 ～ 10 月、英・チェスター近郊で、馬や犬に類似の疾患が流行した [23]。また 1833 年春になると、欧州では再びインフルエンザが流行した。ロンドンでは 1 か月の死亡者数が平時からほぼ倍増、最も深刻な時期には 2 週間にわたりほぼ 4 倍になった [6]。なお、コレラが欧州で蔓延した 1832 年には、インフルエンザに関する記録は確認されていない。

英国から広がったパンデミック（1836 ～ 1837 年）

1836 ～ 1837 年の冬季、英国ではインフルエンザが大流行した。1 月の埋葬数が前年同時期の 2 倍以上となった地域が多かったようである [2, 6]。この流行は、1836 年 10 月第 2 週にシドニー、11 月にはケープタウン、およびバルト海沿岸で観察され、その後スコットランド北部にも及んだ。ただし、記録の不足などから、これが世界的なパンデミックと

呼べるかどうかは意見が分かれている [4, 10]。

一方で、1837 年 1 月にはトルコ・スミルナ（現イズミル）、およびイタリア・トリエステ、3 月にはスペイン、4 月にはジブラルタル、5 月にはマルタ島で、ほぼ同時期に呼吸器感染症の流行が報告されており、地理的には広範な拡がりを示していたことも事実である [2]。

また、プロシアでは同時期に馬や牛の間でカタル性の疾患（catarrh; 一般に粘膜における滲出性の炎症性病態）が流行し、さらにニワトリやキジでも腸管性熱病の流行が記録されている。

英国で甚大な被害

“The Great Influenza”（1847 ～ 1848 年）

“The Great Influenza” と称されるほど、英国に甚大な被害をもたらした 1847 ～ 1848 年のパンデミック。1847 年 8 月にオーストラリア [13]、コンスタンチノーブルで流行が確認され、同年 9 ～ 10 月にかけて、南仏、地中海沿岸、およびドイツに拡大し、年末にかけて欧州一帯からアフリカ北部（リベリア、エジプト、アルジェリア）にも波及した [3]。

翌 1848 年 2 月初旬から中旬にかけては、英国で死亡者が急増した [6]。流行極期（3 週間）の死亡者数は、流行前（同年 11 月第 2 週までの 3 週間）と比較して、小児（15 歳未満）で 1.8 倍、成人（15 歳～ 60 歳）で 2 倍、高齢者（60 歳以上）では 3.5 倍にも達した [14]。特に首都ロンドンでは、1832 ～ 1833 年のコレラ流行（犠牲者 4,000 ～ 7,000 人）を上回る死者が出たとされる [15]。

近代社会最初のパンデミック

「ロシア風邪」（1889 ～ 1890 年）

1889 ～ 1890 年のパンデミックは、中央アジア（当時のロシア帝国）に起源をもつとされ、「**ロシア風邪**」とも呼ばれる。この流行は、近代社会への移行後、最初のパンデミックとみなされており、交通網（鉄道、大西洋航路）の発達も流行拡大に拍車をかけた [16]。1889 年 5 月にウズベキスタン・ボクハラで感染が始まり、同年 10 月にはシベリア・トムスクまで波及した。その後、10 ～ 12 月にかけて欧州一帯（スウェーデン、デンマーク、フランス、ドイツ、オーストリア、ベルギー、英国）まで拡大した。流行は南下し、1890 年 1 月には、トルコ、ローマ、ギリシアに加え、北アフリカ（モロッコ、チュニジア）に広がり、その後、メキシコ、南米、オーストラリアへも波及した [24]。このパンデミックによる死者数は、全世界で 100 万人を超えると推定される。

日本でも 1890 年に流行が記録され、「お染め風」（歌舞伎 おそめひさまつうきなのよみうり の登場人物「お染」に因んだ）と称された。

後の血清考古学的手法 ³ によって、このパンデミックを引き起こしたイ

ンフルエンザウイルスは、H2 亜型であったと推定されている [17-20]。

³ 分離ウイルスの抗原解析ではなく、血清中のインフルエンザウイルス抗原に対する抗体の有無と、その血清採取者の年齢情報をもとに、過去に流行したウイルスの亜型を推定する手法。1889 ～ 1933 年に流行を起こしたウイルスについて、この血清考古学的手法により解析が行われた。

5. 日本での流行

「咳逆」「咳病」「咳病疫」。咳を伴う呼吸器疾患を表す言葉が平安時代の日本の文献に記録されている。『日本三代実録』に記載された「貞観 4 年（862 年）の咳逆の流行」が国内最古のインフルエンザ流行の記録とされている [8]。

18 世紀のパンデミックの頃

享保年間の流行

1732 年から翌年にかけて発生したインフルエンザ・パンデミック [10] は、日本では享保年間の出来事にあたる。実際、当時の資料には、国内でのインフルエンザ流行を彷彿させる記録が複数残っている。

享保年間（1716 ～ 1735 年）の世相を記した『享保世説』には、1730（享保 15）年、「八月下旬より風氣流行致し候、これは異国より渡り、長崎より流行来たり候由、芋酒を飲み候へばのがれ候由・・・」との記載があり、国外からインフルエンザ様疾患が侵入したことがうかがわれる [8]。

また、1733（享保 18）年の記録にも疫病に関する記述が認められる。「六月より七月に至り、海内風邪大流行（泰平年表）」、「七月上旬より疫癘天下に行はる、十三日十四日大路往来絶えたり、藁にて疫神の形を造り、是を送るとて、鉦太鼓をならし、はやしつれて海辺に至る（武江年表）」、「夏六月頃より秋の半に至り、日本国中一統に疫病流行て、大坂三郷の市中にしてこの風を煩ふもの三十三万七千四百十五人と点検せしとかや（成形図説）」などである [8]。「大坂三郷（大坂城下の北組、南組、天満組）で 33.7 万余の患者」との記録は、1750 年当時の大阪の人口推計がおよそ 41 万人 [21] であったことを踏まえると、かなりの罹患率である。

最強力士「谷風」も屈した 1784（天明 4）年の流行

1780 ～ 1782 年のパンデミックに前後して、日本では 1784（天明 4）年に大規模な流行があった。「四月、諸国飢饉、時疫行われて人多く死す（武江年表）」、「天明甲辰四年春、都下人民、患頭痛、壯熱、脈洪大数急、而嘔吐不止者尤多、其証候頗劇、殆有入衰之勢（天明甲辰四年の春、都下の人々は頭痛と高熱に苦しみ、脈拍は早く、しかも吐き気が止まらない者がとりわけ多い。その症状はかなり

激しく、ほとんど衰弱状態になるほどだ）（保嬰須知）」といった記載が残っている。また、当時無敵の力士であった谷風がこの風邪を罹ったことから、「谷風」と名付けられたと記録されている（『兎園小説』五集）[8]。

19 世紀のパンデミックの頃

歌人・伴蒿蹊による随筆集『閑田次筆』 かんでんじひつ からは、以下の通り、鎖国期における唯一の海外貿易港・長崎からインフルエンザが輸入された様子が見える。「享和元年の十二月から、享和二年の正月まで（西暦 1802 年 1 ～ 2 月）、長崎で疫邪が流行し、オランダ人から伝播したとか、去年漂流してきた外国人に由来するとか言われている」「この風邪が長崎から九州を経て、大阪まで広がって、国中に広がった」。また『随意録』には「今茲壬戌三月、天行の風疾、都鄙戸戸無有不寝者焉、西京大阪及諸国亦同焉」 ⁴ といった記載がある。『統皇年代略記』では、この風邪を「薩摩風」、『武江年表』では「お七風」と呼んだという記述がある [8]。

⁴ 「今年壬辰三月、季節よって流行する風疾（風邪の類）、都も田舎も寝込まない者がいる家はなかった、西京（京都）、大阪、その他の国もまた同じ状況である」との意味。

1830 ～ 1833 年にかけてのパンデミックの時期、日本では、都下において広範かつ長期にわたって感染者があふれていた様子を伝える複数の記述が残っている。1831（天保 2）年、「三月末より四月中旬至って、感冒大に行はる」と『時選読我書』に、翌 1832（天保 3）年には「冬、風流行、御救米出る、翌年春まで行はれぬ、この年琉球人来朝せし故に琉球風といふ」と『武江年表』に、「十月中旬より、霜月上旬まで、都下感冒大に行はれ、免るもの殆ど少し」と『時選読我書』にそれぞれ記載されている。

さらに、『時選読我書』には、1832（天保 3）年の流行が急速に伝播した様子が、「西国は九月下旬より始まり、奥羽は霜月下旬に行はれたりと、綿互六千余里の地、僅に二箇月に満たずして衆人同病にかうらざるはなし」と著されている [8]。

官報にみる 1889 ～ 1890 年のパンデミック

日本の「機関紙」の役割を担う『官報』は、1883（明治 16）年 7 月 2 日に第 1 号が刊行され、以来、脈々と現在まで発行が続いている。1889 ～ 1990 年のパンデミック時における国内での流行の状況が、当時の官報に詳細に記載されている（表 4）。

1889 年（明治 22 年）12 月 18 日付の官報には、欧州でのインフルエンザ流行に関して「欧州二於ケル流行病 エビデミックインフルエンザヨーロッパ 流行性感冒歐羅巴二蔓延シ遂に倫敦及伯林二侵入シ裁判所、学校劇場等閉鎖セラレタリ」との記述がみられ、公文書上に「流行性感冒」という用語が

No. 23 重点感染症シリーズ

20 世紀以前のインフルエンザ・パンデミック

確認された⁵。以後、「11 月にロシアで流行し、ベルリンでは、12 月中旬までに人口の三分の一が罹患」(官報明治 23 年 1 月 7 日),「英・バーミンガムでは、1 月初旬までに 5 万人が罹患」(官報明治 23 年 1 月 10 日)という記載が続く。

また、香港での流行性感冒の大流行について「中国人、日本人で感染するものが非常に多いが、症状は軽く、死亡者はいない」(官報明治 23 年 4 月 7 日),「4 月中旬には流行が収束」(官報明治 23 年 4 月 28 日)という記載がある。

8 月以降、官報に罹患報告に関する記載が上がることはなく、日本での流行はおおむね 5 月から 6 月にピークを迎え、7 月末には収束したと考えられる。また死亡者の報告もあまり見受けられない。

⁵ 昭和 26 年 2 月 2 日付の厚生省令第五号「感染症届出規則」の一部改正により、「流行性感冒」の公式な呼び名は「インフルエンザ」に変更された。

東京府の感染者

1890 (明治 23) 年 2 月 13 日附『内務省衛生局長通知 (衛発 54 号)』によって、「流行性感冒による死亡者数」などの報告が義務づけられ、以降、国内でのインフルエンザの発生状況が官報に記載されるようになった。

東京府においても、東京医会がとりまとめた感染者数が官報に記載されており、報告開始から 5 月 30 日までに 1,186 人、5 月 31 日～6 月 15 日までに 9,491 人の患者が記録された (死亡者数については特段の記載はない)。図 1 に、東京 15 区 6 郡それぞれの (a) 1890 年 2 月～5 月 30 日、(b) 5 月 31 日～6 月 15 日の患者数を対比した (東多摩郡の患者数のみ不明)。なかでも本所区および芝区では、両期にわたり 1,000 人をを超える患者が報告されている。

京都府・大阪府・兵庫県

表 5 に示すように、関西においても、1890 年 5 ～ 6 月にピークを迎えている様子を裏付ける患者数が報告されている。

表 4 官報 (1889 ～ 1890 年) でのインフルエンザに関する記述

西暦	明治	月	日	インフルエンザに関する記述
1889	22	12	18	「欧州でインフルエンザエピソード (流行性感冒) により、ロンドン、ベルリンで裁判所、学校、劇場が閉鎖」
1890	23	1	7	「1889 年 11 月にロシアでインフルエンザ流行、ベルリンでは 12 月中旬までに人口の 3 分の 1 が罹患」
		1	10	「英・バーミンガムで 1 月初旬までに 5 万人罹患」
		4	7	「香港での流行性感冒の大流行については、中国人、日本人で感染するものが非常に多いが、症状は軽く、死亡者はいない」
		4	28	「4 月中旬には流行が収束」

京都府では、5 月中旬に医師から届出のあった患者 112 人のうち、58 人が尋常師範学校の生徒であった。6 月の罹患患者報告数は、京都市内で 3,422 人、各郡で 177 人で、初発以降の総計は 3,711 人に達した。7 月に入ると患者数は減少傾向を示し、7 月の罹患患者報告数は、2,308 人であった。

大阪府では、5 月上旬から 6 月 7 日までに 196 人の届出であったが、6 月 8 日以降 2 週間の罹患患者報告数は 10 倍超となる 2,239 人に達した。初発以降の累計は 2,435 人となり、6 月 22 日～29 日までの 1 週間で 852 人、翌週 (6 月 29 日～7 月 5 日) は 404 人であった。5 月 5 日～7 月 24 日までの罹患患者報告総数は 4,025 人にのぼったものの、7 月 25 日以降の新たな報告はなく、大阪では 7 月末までに流行は収束したとみられる。

兵庫県では 3 月中旬頃から罹患患者が認められ、暫時増加し初発以降 7 月 2 日までに総計 3,807 人の罹患報告があった (各市の内訳は表 5 参照)。

新潟県・長野県

信越地方でもインフルエンザは猖獗を極めた (表 5)。新潟県での初発から 6 月 30 日までの罹患患者報告数は 3,340 人 (うち死亡 1 人)。

長野県では 7 月に入っても地域によっては勢いは止まず 7 月 16 日付官報で報告された罹患患者合計は 8,875 人に及んだ。

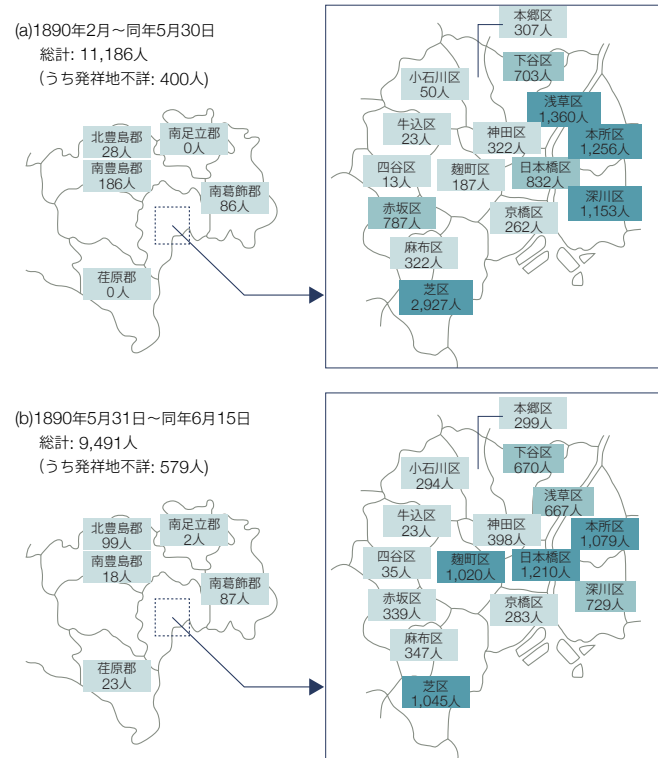


図 1 東京医会所属医師が診察した流行性感冒患者数
官報記載に基づき作成

表 5 流行性感冒患者数 (官報記載)

府県	時期	感染者数 (人)	備考
京都	6 月	3,422	初発からは 3,711 人
	7 月	2,308	
大阪	5 月上旬～6/7	196	
	6/8～6/21	2,239	初発からは 2,435 人
	6/22～7/5	1,256	6/22～6/29 852 人 6/29～7/5 404 人
兵庫	初発～7/2	3,807	神戸市 2,943 人、八郡郡 216 人、武庫郡 151 人、明石郡 61 人、加古郡 8 人、飾東郡 288 人、姫路市 9 人、攝東郡で 114 人、氷上郡 6 人、津名郡 11 人
新潟	初発～6/30	3,340	死亡 1 人
長野	7/16 付官報	8,875	長野市 1,429 人、上田市 3,208 人、松本市 2,384 人、飯田市 1,854 人

相次いだ学校休業

教育現場では、生徒や職員の間での流行により、各地で学校の休校措置が相次いだ (図 2)。千葉県尋常師範学校では、1890 年 4 月下旬に生徒 49 人が罹患。鳥取県尋常師範学校では、生徒 1 人から 40 人あまりに拡大し、休校となった。埼玉県尋常師範学校では 14 人が罹患、岐阜県尋常中学校では職員・生徒の過半数が罹患しいずれも休校措置が取られた、長野県尋常中学校でも流行により臨時休校となった。

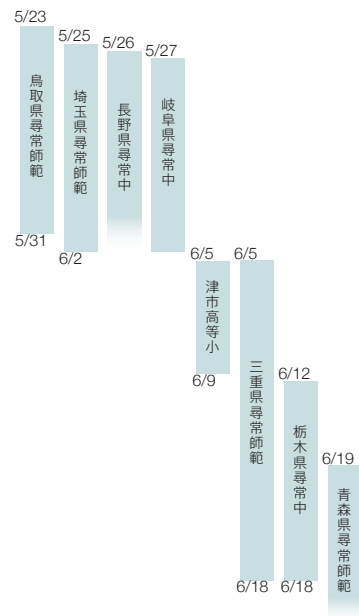


図 2 5 月～6 月にかけて連鎖した学校休校

三重県では、津市高等小学校で罹患者が 100 人に達し、三重県尋常師範学校で生徒数 148 人中 120 人が罹患するなど大規模な感染が確認されたことから、いずれも休校となった。このほか、栃木県尋常中学校で職員 5 人、生徒 60 余人が、青森県尋常師範学校で生徒 40 余人が罹患し、ともに休校措置が講じられた。

References

- [1] Creighton, C., A History of Epidemics in Britain from A.D.664 to the Extinction of Plague, The University Press, 1, 1891
- [2] Thompson, T., Annals of Influenza or epidemic catarrhal fever : an historical survey of past epidemics in Great Britain from 1510 to 1890, Sydenham Society, 1852
- [3] Finkler, D., Infleunza, William Wood & Company, 15, 1898
- [4] Kilbourne, E.D., History of Influenza, Springer, pp. 3-22, 1987
- [5] Fisher, F.J., The Economic History Review, 18, 1, pp. 120-129, 1965
- [6] Creighton, C., A History of Epidemics in Britain from the extinction of Plague to the present time, The University Press, 2, 1894
- [7] Gould, J.D., The Economic History Review, 21, 2, pp. 361-368, 1968
- [8] 富士川游, 日本疾病史, 東洋文庫 133 ed., 平凡社, 1969
- [9] Doraisingham, S. et al., Bull World Health Organ, 66, 1, pp. 57-63, 1988
- [10] Taubenberger, J.K. and Morens, D.M., Rev Sci Tech, 28, 1, pp. 187-202, 2009
- [11] Beveridge, W.I.B., Influenza : the last great plague : an unfinished story of discovery, Prodist, p. 28, 1977
- [12] Bennett, G., On the epidemic catarrh, or influenza, 8, pp. 522-526, 1831
- [13] Observer, A., THE INFLUENZA, p. 4, 1847
- [14] Peacock, T.B., On the Influenza, or Epidemic Catarrhal Fever of 1847-8, J. Churchill, 1848
- [15] 石弘之, 人類の行動範囲の広がりとともに世界各地に感染が拡散, 2023, <https://www.nippon.com/ja/japan-topics/b09903/>
- [16] 加藤茂孝, 第 9 回「インフルエンザ」ー人類に最後まで残る厄介な感染症 -, 57, 2, pp. 39-54, 2011
- [17] Worobey, M. et al., Proc Natl Acad Sci U S A, 111, 22, pp. 8107-8112, 2014
- [18] Davenport, F.M. et al., Bull World Health Organ, 41, 3, pp. 453-460, 1969
- [19] Masurel, N. and Mulder, J., Bull World Health Organ, 34, 6, pp. 885-893, 1966
- [20] Masurel, N., Lancet, 1, 7601, pp. 907-910, 1969
- [21] 高橋正憲, 賃金の日本史 仕事と暮らしの 1500 年, 株式会社吉川弘文館, p. 229, 2023